

Ⅱ. 解説

〔（１）選定保存技術の選定及び保持者の認定〕

（有形文化財等関係及び無形文化財等関係）

1 てきり やすりせいさく 手切 鑢 製作 さわだ えいのすけ 澤田 英之助

（１）選定保存技術の選定について

① 名称

手切鑢製作

② 選定保存技術の概要

手切鑢製作は、鋼の表面に たがね 鑿 を打ち込んで のこぎりじょう 鋸 状 の歯（鑢目）を施し、手作業 やすり で鑢 を製作する技術である。

鑢は、主に素材の表面の おうつ 凹凸を削って へいかつ 平滑にし、せつさくこん 切削痕を付けるためなどに用いられる鋼製の道具で、金属工芸や木工芸などの制作工程に用いられる。優れた手切鑢製作者は、鑢の形状、鑢目の打ち込みの深さ、角度などを工夫して、技術の内容によって異なる様々な用途に合わせた、多様な鑢を製作することができる。今日においては、機械で鑢目を切った大量生産の鑢が普及しているが、美術工芸品等の制作の場においては、切削力をはじめとする機能性に優れる手切鑢の需要が高い。有形・無形文化財の保存のため、手切鑢の製作技術について保存の そち 措置を講ずる必要がある。

（２）保持者の認定について

① 保持者

氏 名 澤田 英之助

生年月日 大正 15 年 12 月 1 日（満 89 歳）

住 所 京都府京都市

③ 保持者の特徴

同人は、伝統的な手切鑪の製作技術を高度に体得している。同人が製作する多様な手切鑪は、機能性に優れ、美術工芸品等の制作の場において高い評価を得ている。また、後進の指導・育成にも尽力している。

③ 保持者の概要

同人は、大正 15 年に滋賀県に生まれ、昭和 14 年から、愛知県で手切鑪製作業を営む従兄の澤田正一いとき さわだ しょういちに師事して、伝統的な手切鑪の製作技術を習得した。さらに、多様な手切鑪を製作して修練を重ね、昭和 16 年に京都府で独立した。その後、主に織機等の製作に用いられる手切鑪を製作し、また、金属工芸等に用いられる鑪の理想的な形状や鑪目についての研究を続け、その技術を高度に体得した。今日では、かざりかなぐ わきょう ぼんしょう鏝金具、和鏡、梵鐘、日本刀の製作などに用いられる多様な手切鑪を製作している。

同人の手切鑪製作技術は、棒状の鋼の両端を固定し、鑿を表面に当てて金鋸かなづちで打ち、鑪目を切っていくもので、その後、焼き入れと仕上げ処理を経て完成となる。

同人の鑪は、切削力をはじめとする機能性が非常に高く、さらに、鑪目の切り直しが可能なため、道具としての寿命が長いなどの様々な利点があり、美術工芸品等の制作の場において、高い評価を得ている。また、後進の指導・育成にも尽力している。

以上のように、同人は、手切鑪製作の技術を正しく体得し、かつ、これに精通している。

④ 保持者の略歴

昭和 14 年 澤田正一さわだ しょういちに師事し、澤田ヤスリ製作所（愛知県）に入社

昭和 16 年 澤田ヤスリ店（京都府）として独立

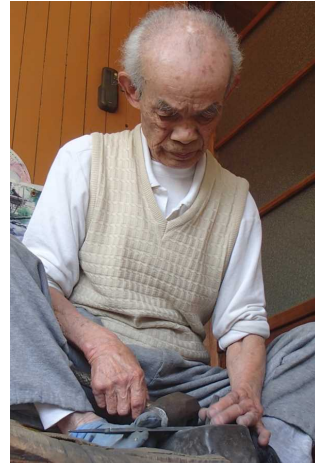
（３）備考

同分野の既認定者

なし



(澤田英之助氏)



(鑿で鑢目を切る澤田英之助氏)

〔（２）選定保存技術の選定及び保存団体の認定〕

1 建造物漆塗けんぞうぶつうるしぬり 公益財団法人日光社寺文化財保存会こうえきざいだんほうじんにっこうしゃじぶんかざいほぞんかい

（１）選定保存技術の選定について

① 名称

建造物漆塗

② 選定保存技術の概要

独特の色艶を持つ漆塗うるしぬりは、彩色・錆金具さいしき かざりかなぐとともに我が国の建造物しょうごんを荘厳する技術として欠かせないものである。漆塗の技法は、部材となる木地きじを固めた後、ひび割防止や補強を施し、下地材を塗っては研ぎ出すという工程を何度も繰り返して下地を平滑にした後、精製した中塗漆せいせい なかぬりうるし、上塗漆うわぬりうるしによって仕上げる。保存修理においては、旧塗膜の劣化を見極め、破損した塗層ぬりそうまでを掻き落とし、必要な工程からなる塗りを施す。使用する工具、漆の調合法や塗り技法は、それぞれの工程で異なり、専門的知識や経験とともに熟達した技術が要求される。

建造物漆塗の技術は、社寺など伝統的な建造物の保存に不可欠であるが、近代以降、油性塗料や合成塗料が建築塗装の主流となり、技能者の減少が危惧されているため、保存の措置そちを講ずる必要がある。

(2) 保存団体の認定について

① 保存団体

団体の名称 公益財団法人日光社寺文化財保存会
代表者 理事長 ^{いなば ひさお} 稲葉 久雄
事務所の所在地 栃木県日光市

② 保存団体の概要

同会は、^{ふたらさん}二荒山神社、^{りんとうじ}東照宮及び輪王寺（以下、日光二社一寺）が所有している105棟5基に及ぶ国宝・重要文化財建造物と伝統的技術の継承を目的として、昭和45年に設立された。文化財修理技術者や漆塗・彩色技能者を擁し、長期計画のもと日光二社一寺の維持保存を図るとともに、保存修理に伴う漆や彩色、金具等技術に関する調査研究も進め、技術の^{れんま}伝承や錬磨に努めている。

漆塗の建造物が集中して^{のこ}遺る日光二社一寺の保存修理を担う中で、同会が培ってきた技術や知見は、関係団体に対する研修などを通じて伝承され、日光のみならず全国の文化財建造物の保存修理に不可欠となっている。

以上のように、同会は、建造物漆塗技術の保存上適当と認められる事業を行う団体である。

(3) 備考

同分野の既認定者及び既認定団体
なし



(下地剤を塗る〈^{さびしたじづけ}錆下地付〉の作業風景) (精製した黒漆を塗って仕上げる〈^{くろうるし}黒漆塗〉の工程)

Ⅲ. 参 考

1. 選定保存技術の選定及び保持者等の認定制度

文化財保存のために欠くことのできない伝統的な技術又は技能で保存の措置を講ずる必要があるものを選定保存技術として選定し、その技を保持している個人又は技の保存事業を行う団体を保持者又は保存団体として認定。

2. 選定・認定までの手続き

毎年１回、有識者により構成される文化審議会の専門調査会における専門的な調査検討を受けて、文化審議会の答申に基づき、文部科学大臣が選定保存技術の選定と保持者や保存団体の認定を行っている。

3. 「選定保存技術」の選定件数と「保持者」及び「保存団体」の認定数について

区 分	選定保存技術 (件)	保 持 者 数 (人)	保 存 団 体 数 (団体)
選定・認定前	7 0	5 6	※ 3 3 (3 1)
今回の選定・認定	2	1	1
選定・認定後	7 2	5 7	※ 3 4 (3 1)

※ 保存団体には重複認定があるため、() 内は実団体数を示す。

4. 「文化財保存技術保存事業費国庫補助」について

選定保存技術保持者及び保存団体には、文化財保存技術保存事業費国庫補助として以下の経費を補助している。

保持者 ～ 伝承者の養成，技術・技能の錬磨等のための経費として１人当たり
年間１１０．６万円

保存団体 ～ 伝承者の養成，技術・技能の錬磨等のため必要な経費